



座談会「コロナ禍の3年を経て“失ったものと得たもの”」



北海道開発協会開発調査総合研究所では、コロナ禍の2021年度から「ポストコロナ時代の北海道観光の可能性」について、研究会でさまざまなケースを調査してきました。

この研究会がスタートした2021年は、新型コロナウイルスの累計感染者数が6万人を超え、世の中がコロナウイルスに怯え、先が見えない苦しい時期でしたが、コロナ禍の苦しい時代を乗り越えた後の「ポストコロナ時代」には、北海道に新たなチャンスが訪れるのではないかと期待して調査・研究を始めました。

コロナ禍前は“オーバーツーリズム”という言葉は聞かれていたものの、“数を求める”観光が主流でしたが、コロナ禍では「人と人との接触機会を減らす」「大人数の場所などの密は避ける」という行動様式がスタンダードになりました。このような“数を求めない”の行動様式が観光に反映された場合、広大な面積を有し、人口密度が低く、自然に恵まれた北海道、特に小規模地域にとっては、新たなチャンスとなることが期待されます。

黒田 小規模地域は人口が少なく、担い手不足から大人数の観光客の受け入れは態勢が整っていませんでした。しかしながら、少人数の訪問は受け入れ可能な地域が多く、ポストコロナ時代の小規模地域は取組次第で持続可能な観光地となり、地域活性化に貢献できるのではないかと考えました。おりしもアドベンチャー・トラベルワールドサミット（ATWS）の北海道開催が決まり、まさに少人数で中長期滞在し、消費単価も高く経済効果の大きいマーケットへの期待が膨らんでい

た時でもあります。この座談会は北海道の地域で活躍されている3名の方々にお越しいただき、コロナ禍を経て地域がどのように変貌を遂げていくのかについて議論したいと思います。

コロナ禍の3年を経て

本日参加いただいている皆さんにコロナ禍時期の総括という趣旨で、コロナ禍の3年を経て思ったことについてお話いただきたいと思います。



小栗 美深町でもコロナ禍の3年で失ったものは、学校教育に関するもの、地域の交流や地域経済などたくさんあると思うのですが、観光分野では、歴史的な祭りやイベントの伝統技術の継承が途切れてしまったり、コロナによって簡素化されたものが、地域の高齢化に伴ってそのまま廃止されたことが大きいと思います。

逆に得たものは、まず今までやりたくてもできなかった企画や制作物などに取り組む時間ができました。美深町は、元々観光地ではなく、都市部からのアクセスも良くはなく、団体客など大人数の受入体制が難しいことが大きな課題でした。コロナ禍で、個人や少人数の旅行が増え、観光客が人の少ない地域に足を向けるきっかけとなったのは、大きなチャンスとなりました。コロナ前から少人数、高単価、高価値の観光を目指していたので、バッチリはまった感じはあります。

小野 南富良野町の観光は、アウトドアが中心になっています。自然が豊富なので自然を活かして、今あるものを活かして、お客様に楽しんでもらうフィールドを作りたいと思っています。それには、見てもらい、感じてもらうことが大事なので、まずは来てほしいと思っています。何もない森を見て、自然の匂いを感じることを体験し、いろいろな写真を撮ってSNSで発信してもらおうという企画を考えています。

南富良野町の観光パンフレットは、どこにでもあるようなパンフレットでした。そこで女性は読み物が載っているパンフレットを手取る傾向があると感じて、

今回は、エッセイストに全部作ってもらいました。女性目線のエッセイを入れた第一弾の評判がよくて、いろいろな町からこのようなパンフレットを作りたいと言っていたりもしました。

中西 私が代表をつとめている「一般社団法人ドット道東」は、ブランディング、PRの仕事をしています。創業したばかりの2020年に道東のアンオフィシャルガイドブック「.doto」を発行しました。2023年3月には台湾版が出版され、たくさんの読者がいます。

2021年に道東4地区観光連盟協議会さんと一緒に、道東地区内でのマイクロツーリズムを推進しようと、「Stay DOTO!」というSNSキャンペーンを展開しました。コロナ禍で移動が制限され、地域内での旅行が推奨される中で「道東内での周遊を促す」「多くの人に参加したくなる」をテーマに、SNS企画の立案から運用までを支援しました。道東の中で自分たちが誇れるところを写真で投稿するキャンペーンです。

2023年は、さらに発展させた事業をやろうとしています。地域の旅館など、観光の事業者さんだけではなく、いろいろな地域のプレイヤーとつながっている方に案内人になってもらい、旅のコーディネーターができれば、地域をもっと深く楽しむことができるのではないのでしょうか。私たちは、道東の各地に人のネットワーク、情報を持っているので、コーディネーターさんを見つけて、一緒にツアーを造成できるような人材を育てていくことに取り組んでいます。

黒田 道東地区では、ありきたりな観光は求めてない。人、暮らしにフォーカスをあてるなど、少し変わった観光商品を作ろうということでした。一方で美深町の「終り火^{*}」が10年目で終わると聞きました。熱心なりピーターが少なくないようでしたから、悲しむ人が多いのではないかと思います。ひと区切りを決断した理由は何ですか？

小栗 「終り火」は、今がピークの時です。1泊2日、1人29,000円、現地集合、現地解散、宿泊は1日定員15名、2日間にわたって合計30名が毎年参加してくれました。いつも募集を開始して1時間で定員になりま

^{たきぎ}
※美深町仁宇希で、非日常的なアウトドア料理や手軽に作れるクラフト体験、満天の星の下、静かに囲む焚き火でお酒と夜長を楽しむ会。

す。このピークのイメージをもって終わりにすることで、次のステップに進みたいと思っていました。イベント自体で収益を得たいということではなく、北海道ならではの季節ごとに風物詩を作りたいと考えていました。北海道の閑散期である11月に何か風物詩を作りたいくて、北海道の11月は「終り火」という季語となるような、何か文化を作れないかということで始めました。「終り火」という文化だけ残って、発祥の地が美深町であればいいと思っています。

黒田 「終り火」が仮に全道各地で出てきた時に、実は「終り火」の聖地は美深町ですとなれば、美深ブランドの価値が高まるということですね。

聖地ということでは、南富良野町は、どのようなイメージのアウトドアの聖地を目指すのですか？

小野 南富良野町が得意なところを伸ばすことが観光にとって一番良いと思います。いろいろな分野のアウトドアガイドさんが30人以上いるので、アウトドアの町と呼べます。でもあまり知られていない、知る人ぞ知るという現状なので、南富良野町の観光に「アウトドアの聖地」というキャッチフレーズを明確にし、きちんとブランディングをして、伝えていきたいと思っています。

黒田 アウトドアの聖地という表現は、全国のいろいろな地域で使われています。北海道らしい、南富良野町らしい聖地と言うとしたらどのような要素がありますか。

小野 空知川があり水資源が豊富な町です。海ではなくかなやま湖が大海のようになっていて、絶滅危惧種の「イトウ」が回遊して、空知川を上り、産卵することを繰り返しています。イトウが繁殖しているので、そこを押していけないかと考えています。

黒田 良い商品や素晴らしさが伝われば成果につながります。しかし、その伝え方がなかなか難しいと思います。中西さんの仕事の一つとして情報を伝えることがあります。地域の魅力を伝える上で大切なことは何ですか？

中西 その地域で暮らしている人々が、直接的に観光



小野 寿樹氏

に携わってなくても、ステークホルダーになれるかもしれません。私たちは、Stay DOTO! ツアー事業を考える上で、観光事業者ではなくても、さまざまな住民の方々が観光の一コーディネーターとして参画できないかを追求してみました。例えば、役場の職員が副業として関わることができれば、既存のリソースを活用できると思います。いかにそれを掛け合わせていくか、参加できる人を見つけられるかを大事にしています。そうすると情報の発信力も、関わっている人の数だけ、増えていくと思うので、自分事として自分の口で言える人を増やすということは、いろんな部分で大事だと思います。

黒田 コロナ禍が社会経済に与えた影響の一つとして、オンラインが増えたことだと思っています。会議だけでなく、観光プロモーションや商談会もオンラインで可能になりました。

小栗 オンラインツアーは、いろんな補助金が使えるようになった時期があり、それに伴って無理やり実施したところもあります。実際に商品化したり、今後も続いていくことは、なかなか難しいと感じます。

小野 実際に行かなくても見られるということでしたが、旅行会社さんは、それだけだと喜んでもらえないから、次は物を付けました。現地の特産品の発送とセットにした商品を販売して、食べながら見られる、飲みながら見られるという感じでやっていましたが、もうオンラインツアーの話は聞かなくなりました。



中西 拓郎 氏

地方の大きな課題「人口減少と人材不足」

黒田 北海道の地方では、人口減少に歯止めがかかりません。このままでは消滅してしまうかもしれないという危機感を持っています。観光は裾野が広く、経済効果が大きい産業と言われています。地方に観光客を誘致することは、単に観光事業者だけでなく飲食店、さらには農業などの一次産業へも波及します。また、一度地域に訪れた方がファンとなってリピーターとなってくれたり、再訪しなくても関係を持ち続ける、「関係人口創出」にも寄与できる可能性を持っています。しかし、可能性の大きい観光も人材不足が大きな課題です。特にコロナ禍後、人手不足という「数の問題」がマスコミ報道等で大きく語られています。観光客が来たくても、人手不足で受け入れができないという問題です。また、数だけでなく将来を担っていく人材の確保という「質の課題」もあります。観光人材も小栗さんや小野さんのように、地元へ戻ってきてくれる人材がいる町は恵まれていると思いますが、後継者をどう育成していくのかも課題だと思います。

小栗 私たちの地域は、少子高齢化の最先端に位置しています。何をしても圧倒的に人が足りていない状況です。観光に直接関係する宿や飲食業などは特に顕著で、店ができて従業員やアルバイトがいないので、基本的に小規模で、従業員1人か夫婦2人かのお店しかない状況です。町のみなさんは、仕事を兼業しながらマルチタスクで、お互いの業種を支えあって

いるので、特に若者は何でもできる人ばかりです。若い人材が少ないということに関係しますが、多言語に対応できる人材や、企画、運営をマネジメントできる人材が不足しています。中間世代の人数も少なく、65歳以上の割合が50%近くになっていることが大きな要因だと考えています。ただ、現状の優先順位としては、学生や主婦層のアルバイトが一番必要とされているのではないかと思います。

小野 南富良野町は人口減少・過疎化が長く続いており、全ての業界で労働力と人材が不足しています。コロナ禍後になって、その度合いがさらに増えています。観光に力を入れたいのですが、現実には人材も含めて、その基盤作りから進めなければならない状況であり、一人ではどうしようもない無力さを感じています。

基本的に小さな町に専門的なスキルを持った優秀な人材を集めることはとても難しいと感じています。富良野市からでも車で約50分かかり、峠越えとなるので、通勤は難しいと思います。また、南富良野町では住宅事情も大変厳しい状況となっています。

中西 例えば、すごく魅力的な仕事があり、働きたくなるような会社が地方に立地することが重要なことです。地方の中小企業は、そういう魅力的な仕事をいかに増やせるかが大事な視点だと思います。当社も求人への情報発信をしていますが、すべての求人応募があるわけではありません。そうした中で、1社2、3人採用するところや移住を伴って20代前半の人が来るケースが見られています。その特徴は、何か面白そうな求人、社長の右腕、新規事業の開発、新しい部門の将来の幹部候補といった求人でした。そういう求人については、特に若者の感度が高く、成約することがわかってきました。

特に地方では、自分にあった働き口を見つけることが難しい場合が少なくないです。仕事自体はありますが、スキル、キャリアを持っている人が働けるのは限られているので、待遇とかを気にせずに我慢をして仕事をするようになります。若い人材が地方に戻りたい、来たいと思ったときに働ける受け皿があることは大

事です。働き方の多様性も広がってきていますから、仕事をいくつか兼務すれば、やりたいことが見つけれられるのではないかと思います。働き方の自由度を高めない、今までどおりには人が採れないと思います。自由度が高まるとまだまだ可能性がありますので、そこは、受け入れ側の努力として必要なことだと思います。

将来に向けての展望と期待

黒田 最後にこれから「どのような地域にしたいか、どのような地域でありたいか」など将来展望と期待についてお聞かせください。

小栗 美深町の観光の最終目的は、移住だと考えています。自然や気候、食べ物や産業などのオリジナリティ、町のアイデンティティを、まず観光を通して感じてもらい、その先に長期滞在や二地域居住などがあり、最後に移住や開業などにつなげていくための観光に取組みたいです。今ここに無いものは自分たちで作る、をお客様と一緒に楽しんでいけたらと思っています。コロナ禍では、多人数、多資金、多アクセスの優位が大きく変化したと考えます。生活スタイルが変化し、観光に対する選択肢も増え、地域への流入も分散化されました。この機会を得たものを活かし、新しく、面白く、稼げる地域を目指していきたいです。

小野 南富良野町は「知る人ぞ知る」アウトドアの聖地ですが、これを「誰もが知る」アウトドアの聖地となるようにイベントや告知活動を進めていきます。また、着地型観光を推し進めるために、町民と観光について議論をするセミナーやワークショップを実施しようと考えています。観光に対する町民の意識を高める活動を観光協会として行いたいと思っています。

中西 私は、道東に住む人々の活動や人材については、まだつながっていないこと、まだ潜在化していることが、たくさんあると実感しています。そのようなことが顕在化していくだけで、まだまだ魅力が増え続け、その掛け合わせによって可能性は、さらに無限大になることを感じています。引き続き地域の中で、いろいろなブランディング、PR、求人^のの事業等に取組み、何か



黒田 秀徳

一つでも私たちの力が活かされると良いと思っています。

黒田 北海道の小規模地域でのがんばり、生まれた成功事例が北海道全域の力となり、さらに元気な北海道になっていくという期待を感じられる貴重なお話が聞けました。

(本稿は、令和5年12月5日に行われた座談会の概要です)

小栗 卓 (おぐり すぐる)

美深町観光協会 事務局長
札幌や東京で一般企業に勤務し、その後、美深町へUターン。2010年より、美深町観光協会に所属し、後に事務局長に就任。道北文化創造プロジェクト「BASIS」のプロジェクトリーダーを務める。

小野 寿樹 (おの ひさき)

NPO法人南富良野まちづくり観光協会 事務局長
2021年11月に南富良野町の町職員として35年ぶりにUターン。2022年5月NPO法人南富良野まちづくり観光協会に事務局長として出向。南富良野町を観光で盛り上げるために奮闘中。

中西 拓郎 (なかにし たくろう)

一般社団法人ドット道東 代表理事
2012年北見市にUターン。フリーランスとしてローカルメディア運営・編集・プロデュースなど幅広く道東^の仕事を手掛ける。2019年5月、「理想を実現できる道東にする」をビジョンに掲げ、道東地域を拠点に活動するソーシャルベンチャー一般社団法人ドット道東を設立し、現職。